

『女殺油地獄』論

宮井浩司

一

森修氏は近松の諸作品のなかで「義理」という言葉が晩年になるほどその使用数が増加し、特に『心中天の網島』『女殺油地獄』（以下、『油地獄』と略記する）が共に八例と、最も多く用いられていることから、この二作品の「義理」を論じている。^{（下）}氏は、「義理」が作品内でどのように用いられているかを分析して、『心中天の網島』では「義理は世間の道義とか束縛というよりは、治兵衛・小春・おさんの間の人間的な責任、誠の問題である」とし、『油地獄』では「義理は与兵衛と両親とお吉との関係より成り立って」おり、「与兵衛に関係した義理が世間の道義（道理）の意味に用いられている」のに対して「徳兵衛夫婦の間でいわれる義理は、（中略）夫婦として、親として守らねばならぬ責任からいわれている。それは束縛的な世間の義理という

よりも、人間的な義理、誠の意味がつよい」とまとめている。また、近石泰秋氏は、「世話物における義理は時代物における主従間の忠義の義理ではない。親子兄弟夫婦間の義理、朋友隣人間の義理などの社会（主として町人社会）の義理である」と述べている。

このような「義理」に対する解釈には特に異論はないが、注目すべき点は、「義理」が人間と人間の関係性を問題にしているということである。「油地獄」が「義理」を多用しているということは、そうしなければならぬものを「油地獄」が内包しているということにほかならない。具体的には、関係性という劇的単位がどのように積み重ねられているかをみることで、『油地獄』の劇的なものの正体をあきらかにできると考える。

『油地獄』の登場人物が、与兵衛とお吉を中心として互いに知り合っていることを考慮すると、登場人物間の関係性は一旦は成立していることになる。したがって以下の論考において問

題にする劇的単位としての関係性は、コミュニケーションの成立や相互行為による「関係性の回復」と「関係性の持続」、コミュニケーションの断絶や別離による「関係性の切断」の三つである。これは、ある人物が登場して会話をすれば関係性の回復であり、退場すれば関係性の切断である、という単純なことではない。「油地獄」では登場人物一人ひとり、一つひとつの行為が、それぞれ関係性を考えなければならぬほど複雑な状況が設定されているからである。

また、これまで繰り返し論じられてきた「与兵衛の性格」や「与兵衛の改心」については、ここでは論じないこととする。劇的単位を個人が内包するものに還元せず、あくまで人と人との関係性において捉えたいからである。

二

上之巻の冒頭「屋形船の場」に登場するのは、屋形船に乗る蠟九と小菊である。蠟九と小菊の二人は『油地獄』の主人公たちではない。主人公でない蠟九と小菊二人の野崎参りは、のちに与兵衛との喧嘩へとつながり、さらにその喧嘩が原因で与兵衛の生命に危機的状況をもたらすことになるわけであるから、上之巻における劇展開の伏線として「屋形船の場」が設定されているわけである。

しかし、この場は単なる伏線として設定されているわけではない。小菊は蠟九との仲を噂されるのを嫌ったため、乗っていた船から陸へひらりと飛び上がり、びらり帽子で眉を隠して歩

きはじめる。小菊は蠟九から離れ、世間の目からも逃れようとする。小菊のこの行為は関係性の切断である。

あらかじめ言ってしまうと、小菊の同様の行為は、主人公である与兵衛との関わりにおいても見られる。小菊は与兵衛らが待ち構えているのを遠目に見たときにも隠れようとして、関係性の切断を図る。そして、いざ見つかると「連れ立つて参らぬも、みんなこな様のいとしさ故」と言い逃れをする。この言葉はむろん本心ではなく、遊女としての手管である。一方、与兵衛は小菊との関係性の回復を意図して蠟九と喧嘩をしてしまう。しかし与兵衛の行為は完全に裏目に出る。八弥に泥をかけるという重大事につながっていく、小菊や花車は「手ばしかく、参りの諸人にまぎれて退く」と、与兵衛を置いて逃げていってしまうのである。小菊の与兵衛に対するこの行為も関係性の切断である。手管に翻弄されてつかみあいの喧嘩をしまい、生命の危機をむかえてしまう与兵衛の幼児性・不良性を指摘するのは簡単である。重要なのは、与兵衛が小菊との関係性の回復を意図しているのに、小菊の方では関係性を切断しようとするところにある。このように、冒頭から語られる関係性の回復と切断は、『油地獄』の劇的単位として、このあたも何度もあらわれてくることになる。

続いて上之巻「喧嘩の場」では、お吉と与兵衛が登場してくる。廣末保氏は二人の間には「惨劇が起こりうるかもしれないような雰囲気」があり、「何か細い一本の糸のようなものが通っている」と述べている。これも劇的単位としての二人の関係性が、回復してすぐに持続されることを考えればすつきり解釈で

さる。通りかかった与兵衛に茶見世の内より、「申し、与兵衛様。愛へ」とお吉が話しかける。「やお吉様、子供衆連れの参りか。存じたら連になりませよもの。七左衛門殿は留守なさるゝか。」「いや、こちらの人も同道。二、三軒寄る所もあり追付愛へ見へるはず。お連衆もマアこれへ、ひらに」と強いられて「煙草一服いたさうか」と、会話はスムーズに進む。また、七左衛門がこの場にいなくても、二人の関係性と大きく関係がある。与兵衛は七左衛門がいなくてきだけお吉と関係性を回復できており、七左衛門がそばにいるときはお吉は与兵衛と関係性を切断してしまうのである。

お吉は与兵衛が入れ込んでいる遊女の事もよく知っており、「なんと与兵衛様。……こんな様も連立ちたい者がある。こんなをりに新地の天王寺屋小菊殿か、新町の備前屋松風殿か。なんとよふ知つてゐるか。なぜ連立つて参らんせぬ」と、普段から与兵衛と関係性が持続していることがわかる。

与兵衛に話しかけてくるのがお吉のほうからであり、二人の間にコミュニケーションが成立しているということは、極めて重要なことである。与兵衛からお吉に働きかけて関係性を回復させようとするのではなく、お吉の方から関係性を回復させており、その関係性は持続するのである。与兵衛とお吉の間の「雰囲気」や「何か細い一本の糸のようなもの」は、コミュニケーション成立に依存した関係性の回復と持続が、唯一お吉との間にあることに由来するものである。

しかし、この関係性の成立と持続は極めて微妙なバランスでなりたっており、ちよつとしたきっかけで切斷される。お吉が

徳兵衛夫婦の「そちへは与兵衛めが間がな隙がな入りひたつてをる。意見して下され」という言葉を話しはじめると、与兵衛は黙り込んでしまう。お吉が徳兵衛夫婦に他者の言葉を語るということは、お吉を透過して徳兵衛夫婦に他者が与兵衛の前に立ち現れてくることであり、そのため、一時的にせよ与兵衛はお吉との関係性を切断してしまう。あらかじめ述べておくと、与兵衛は他者とのコミュニケーションを成立させようとはせず、お吉以外の人物とは基本的に関係性を持つとうとしないのである。関係性の切斷をきっかけとして、お吉は娘らを連れて本堂へと向かい、与兵衛の前から姿を消す。

筋の展開にしたがつて、お吉に続いて、蠟九との喧嘩で痛めつけられた弥五郎と善兵衛は与兵衛を見捨てて逃げ出し、八弥への慮外に気付いた蠟九や小菊等も与兵衛の前から姿を消す。与兵衛と関わりを持っていた登場人物はいずれも与兵衛との関係性を切断してしまい、与兵衛は野崎参りの群衆の中で孤独になる。さらに、与兵衛がその孤独を感じできる前に、武士の世界、つまり与兵衛にとつての外的世界に放り込まれてしまう。与兵衛はいわば二重に疎外された空間に孤立することになる。

泥をかけたことで与兵衛は高槻家の徒士頭山本森右衛門に捕らえられるが、二人が伯父甥の血族関係にあることによる関係性の回復よりは、与兵衛は町人であり森右衛門は武士であること、つまり両者が互いの外的世界に属する人物であることで関係性が切斷され、したがって与兵衛と森右衛門との間にコミュニケーションはほとんど成立しない。「ヤア森右衛門殿、伯父じや人」「ム、与兵衛めか」と言い合うだけで、「ヤイおのれは町

人、……討つて捨てる、立ちませい」と言う森右衛門に対して、与兵衛は返事もしない。かわりに主人八弥が「ヤイ、く、く、ヤイ森右衛門。見れば其方が大小の鞆口、詰めやうが緩さうな。……下向までは随分鞆口に心をつけて、森右衛門供をせい、く、く」とその場をとりなして、与兵衛を見逃す。森右衛門と八弥の間でのみ会話が成立し、与兵衛の危機的状况は一旦は回避されるが、逆にいえば与兵衛にとつてこの狀況は葛藤になりえていなかった。行為選択の余地が何もないからである。したがって、わずかの行為もなくなってしまう、この間与兵衛は「かたり」から消え失せてしまうのである。与兵衛は主体的に危機的状况を回避することができず、行為を喪失したまま二重に疎外された空間に立ちつくすことになる。

また、森右衛門は「おのれ下向には首を討つ。しばしの命」と突き放す。本心では「随分伯父が目にかゝるな」と言いたいの、侍気ゆえそのことを口には出さないのである。伯父が与兵衛とコミュニケーションを成立させたいということ、つまり関係性をわずかながら回復させようとしていることは、観客には伝わっているが、与兵衛には伝わっていないのである。与兵衛と森右衛門との関係性は切断されていることになる。与兵衛はコミュニケーション断絶によつて森右衛門の意向を知りえず、下向の折に再び窮地に追い込まれることになる。

一旦「かたり」から消え失せた与兵衛が再び「かたり」に登場してくるのは、八弥、森右衛門らが代参に向かつてからである。この時の与兵衛は武士の外的世界から開放されたにもかかわらず、「伯父の下向に切らるゝはづ。切られたら死なふ。死

んだらどうしよ」「ハアかう行けば野崎、大坂はどちらやら方角がない。こつちは京の方、あの山は關、但比叡山か、どこへ行たらば逃れう」とうろたえるばかりである。野崎が異界と化してしまうのである。そこへお吉があらわれたため、与兵衛はすぐに「わしや今切らるゝ、助けて下され。大坂へ連れて行て下され、後生でござる」と話しかける。異界で関係性を切断されて孤独になつていた与兵衛は、自分で危機的状况を打開することができず、お吉との関係性を回復するのが精一杯である。与兵衛に主体的行為はみられない。

お吉もまた与兵衛に返答し、着物と体を洗つてやることで、関係性の回復を願う与兵衛の期待に答えようとする。与兵衛とお吉の間で回復された関係性は、単なるコミュニケーション成立のレベルではなく、茶屋の内という、いわば密室での身体的かつ血族的なレベルで成立している。身体的とは、「母様は愛の茶屋の内に、河内屋の与兵衛様と二人、帯解いて、べゝも脱いでござんする」という娘の言葉で夫七左衛門が誤解したように、体を洗うという行為に極めて性的なイメージがつきまといていることであり、血族的とは、手間のかかる子供とその世話をする母親というイメージがつきまといっていることである。みづからの行為でありながら、お吉はこの密接な関係性の自覚がない。七左衛門の方は漠然とした不安を抱き、「人の世話もよいころにしたがよい。若い女が若い男の帯解いて、そうして後で紙で拭ふとは尾籠至極、疑はしい」とお吉をたしなめることになる。自覚がないお吉は七左衛門があらわれたのをきつかけとして、与兵衛との関係性を簡単に切断して、娘らと共に帰つて

しまうのである。

お吉が去り、茶屋の亭主や在所の者からは追い立てられ、逃げそこなって、下向の森右衛門に見つかった与兵衛は再び二重に疎外された空間に立たされる。結果的に与兵衛の命は助かるのであるが、それは代参の時と同様、与兵衛みずからの行為によつて主体的に危機的状況を回避するのではなく、八弥のなきけによるものである。

二重に疎外された空間に立たされ、関係性が切断された孤立状況での行為喪失が与兵衛の生命を危機に追い込んだこと、それに対して与兵衛は葛藤を葛藤として主体的に解決する行為選択の余地がなく、解決が他人にゆだねられていることこそ、それが上之巻だけで二度にわたつて繰り返されていることから考えて、『油地獄』上之巻における劇的なるものと言えよう。

三

中之巻「河内屋の段」は「下向の場」と「勘当の場」からなつている。

「下向の場」では油屋仲間の山上講帰りの連中が河内屋を訪れる。彼らは「なんと与兵衛、内にかく」。講中何事なふ、お山勤めて有難い。今日の下向は知れたこと、ねんごろな友達は、桑津まで迎ひにじや。おぬし一人見えぬは、気色でも悪いか。忝い御利生見てきた。これが土産、まづ話さふ……」と、与兵衛が迎えに来なかつたことを心配、あるいは非難して、土産話を始める。これは、与兵衛からすれば油屋仲間との関係性を切

断した状態であり、講連中からすれば与兵衛との関係性を回復しようとしての行為のようにみえる。しかし、講連中の行為は奇妙である。実際徳兵衛は家にはいないのだが、与兵衛が家にいるかないかも確認せず、一方的に土産話をしてしまう。コミュニケーションモデルによれば、コミュニケーション成立のために六つの基本機能が必要不可欠であるが、この場合は受信者と接触の二つが欠落していることになる。講連中のコミュニケーションは成立しないのであり、与兵衛との関係性の回復を意図しているかにみえる講連中の行為は、擬制にすぎないのである。与兵衛を疎外しているといつてよい。したがつて、この場面は与兵衛の積極的な関係性の切断および、講連中の擬制的行為による消極的な関係性の切断という劇的単位が表出された場として捉えることができる。このように中之巻では、特にコミュニケーション成立や断絶および他者の言葉を語ることに関わる関係性の回復や切断が、劇的単位として繰り返しあらわれ続ける。

走り出てきた徳兵衛は、与兵衛が自分たち家族から金をだまし取っていることを打ち明けたあと「十貫近ひ銭取つて、どこに、迎ひにも出をらぬ。神仏の罰も思はぬどろく者。友達がい引締めて、意見、頼みます」と言う。与兵衛の行状を心配してのことであり、与兵衛がもはや親の言うことを聞かなくなっていること、自分の言葉を他者に委託してしまうことは、徳兵衛と与兵衛の関係性はほとんど切断された状態であることを示している。

続いてあらわれた母お沢は、妹の病氣のことを相談する。油

屋仲間とはいえ、徳兵衛にしてもお沢にしても、家庭内の状況をあからさまにしすぎている。作劇上からは観客に対する説明になるわけであるが、徳兵衛お沢が相談相手として互いに認めあつておらず、コミュニケーションを取りあつていない状況、つまり二人の間の関係性が切断されていることがわかる。

「勘当の場」では、まず、順慶町の兄太兵衛が伯父森右衛門の手紙の内容を知らせに来る。太兵衛によつて与兵衛の悪行と森右衛門の窮地におちいつた状況があきらかになるが、重要なのは森右衛門が徳兵衛お沢に直接手紙を送らずに、太兵衛に送つたことである。森右衛門は徳兵衛夫婦のコミュニケーション断絶による関係性切断を認識しており、自分の情報が両者の共通情報にならない可能性を危惧したと考えられる。そのため太兵衛を媒介にして徳兵衛とお沢の関係性の回復を図ろうとするのである。上之巻ではお吉が徳兵衛夫婦の言葉を話すことが関係性の切断をもたらしたが、これは普段与兵衛が自分の悪行に対する親の小言を聞こうとしていなかったため、つまり、両親との関係性を切断していたことから生じたのである。それに対して、ここでは、他者の言葉を話すことで関係性の回復を図ろうとする状況がみられる。さらに、使用人筋であることを嘆く徳兵衛に、太兵衛が徳兵衛の遠慮に対する母お沢のいらだちを話すのも同様に考えればよい。関係性が切断されているため自分の心情を話せないお沢にかわつて、媒介者として太兵衛がそれを伝え、徳兵衛との関係性を回復しようとしているのである。

関係性の回復を意図して他者の言葉を話すという行為は、こ

のあとに三度繰り返されるが、どれも成功しない。なお、最初の二回はどちらも与兵衛の策略である。一度目は、金をだまし取ろうとした与兵衛の嘘である。与兵衛は森右衛門からの手紙のことを話す、徳兵衛は太兵衛のもたらした情報によつて嘘を見抜いており、「鈍な評定する隙がない」と取り合わず、この場は与兵衛との関係性を切断したまま法印と会話する。与兵衛も一旦は関係性の切断を受け入れ、法印の加持を見物することになる。二度目は、妹おかちが実父徳兵衛の言葉を話すことである。実父の言葉で遊女との婚姻を認めさせようとするが、徳兵衛は承知しないので、暴力をふるう。一度目の失敗は、自分の計略があとにひかえているため、そのまま事態の推移を見守つたが、二度目の失敗はそのまま見過ごすわけにはいかず、暴力という手段による関係性の回復を図つたのだが、これは恐怖による服従にほかならず、関係性の切断と同じことである。反撃が関係性切断の明確な意思表示であるとすれば、徳兵衛の無抵抗は関係性回復の消極的な許諾と考へてよいと思う。徳兵衛への暴力を見かねたおかちが与兵衛の計略を告白する。与兵衛と徳兵衛の関係性を回復しようとして、他者の言葉を話すわけである。これが三度目である。おかちのこの行為は、逆におかちへの暴力を導き、与兵衛とおかちの関係性も切断されてしまう。関係性の回復が失敗したとき暴力に訴えるのは、上之巻で蠟九と喧嘩をしてしまうのと同じであり、また、その暴力が与兵衛の危機的状況を導くのも上之巻と同じである。

帰宅したお沢は、暴力をふるう与兵衛を投げ倒してなぐりつけ、親としての悲しみを述べる。追い出そうとして振り上げた

天秤棒を奪つて逆に与兵衛がお沢をぶつと、とうとう徳兵衛が与兵衛を叩く。お沢徳兵衛の行為と悲嘆が観客にある種の感動を呼び起こさせるのは事実だが、実際は、二人の行為は暴力による関係性の切断であり、二人の悲嘆は自分の心情を今まで吐露できなかったコミュニケーション断絶を示すものに他ならない。しかも二人はまだ真情を隠しており、それが互いにあきらかになるのは下之巻なのである。

お沢は与兵衛を叩きながら「おのれ先度も、高槻の伯父御が、お主の銀を引負ひしと、よふもく、この母をぬくく」と欺したなア。たつた今、兄太兵衛に行合ひ、おのれが野崎のあばれゆへ、伯父は侍一分立たず、浪人し大坂へ下るとの便り。おのれが嘘が頭れた。その時、母がつかくと親仁殿へ話し、跡で知れては、さては親子の言合せと疑はれ、夫婦の義理も欠果てる。……半時もこの内に置くことならぬ。勘当じや、出て失せう、出されく」と言う。与兵衛は徳兵衛をだます前に、お沢にも同じことを言つてだましていたのである。しかし、お沢はそのことを徳兵衛には相談していなかった。太兵衛のもたらした情報で真相を知つたお沢は、あの時うっかり徳兵衛に相談してしまつてあとで嘘と知れたらば母子共謀と疑われていた、と言うのである。お沢は徳兵衛との関係性を維持するつもりで余計な気をつかい、実はコミュニケーションが断絶していることに気付いていない。また、与兵衛との関係性については、暴力による関係性の切断に続いて、「勘当」という与兵衛との関係性切断を宣言してしまう。お沢の行為は与兵衛に対する二重の関

一方徳兵衛は「この徳兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず、存分に踏まれた。腹を借つた産みの母に今のざま、脇から見る目も勿体なふて身が震ふ。今撲つたも徳兵衛は撲たぬ。先徳兵衛殿冥途より、手を出してお打ちなさるゝと知らぬかやい。おかちに入婿取るといふは跡形もないこと。エ、無念な。妹に名跡継がせては口惜しと恥入り、根性も直るかと思案しての方便。あの子は余所へ嫁入りさす、氣遣いな」と言う。徳兵衛の無抵抗は与兵衛を主筋と思つてのことであり、与兵衛に手を出すためには主人である先代徳兵衛に自分を仮託しなければならなかつた。自分を透明化しなければ関係性を回復できないというのは、逆に普段は切断されていることになる。しかも暴力は先述のように関係性の切断にはかならない。お沢同様、徳兵衛の行為も二重の関係性切断である。

さらにお沢は「出て失せく。うぢくひろかば、町中寄せて追出す」と、単に家から追い出すのではなく、公的な勘当を告げる。与兵衛が「町中といふにぎよつとして、と胸つきたる怪顔顔」になるのは当然である。与兵衛は家族との関係性切断だけでなく、帰属する社会との関係性まで切断されてしまうことになるからである。上之巻にみられた、二重に疎外された状況と同じである。与兵衛に選択の余地はなく、家を出ていくこと以外の行為を喪失し、「こすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川。……余所の絵幟に影も、隠れて」と、「かたり」から消えていく。

与兵衛が二重に疎外された空間に立たされ、選択の余地のない状況で行為を喪失してしまい、「かたり」から消滅していくこ

とは上之巻と同じだが、中之巻では問題解決をゆだねる人物がおらず、葛藤が棚上げされたままになっているのである。それは、勘当が生命の危機に直接関わるものではないためであろう。ともかく、劇的なるものが少し姿を変えて繰り返されていることとなる。

四

「下之巻」油見世豊島屋の段」は「髻梳きの場」「お吉殺しの場」「新町の場」「北の新地の場」「豊島屋の場」からなる。

「髻梳きの場」は、別れを意味する投げ櫛、野辺送りの立ち酒と、不吉な事が続き、一度帰宅した夫七左衛門も再び掛け金を取りに出掛ける。もう遅いからと止めるお吉に、約束だからと天満の池田町まで行くのである。商人として節季を重視するのは当然だろうが、強いて出掛けるというのは、劇的单位としての関係性切断と捉えてよいだろう。

続く「お吉殺しの場」は、まず、お吉の家を覗くお兵衛に上町の口入れ屋綿屋小兵衛が借金の返済をせまる場面が始まる。ここではじめてお兵衛がかかえていた葛藤が明らかになる。すなわち、父の偽判によつて銀二百匁、額面一貫目の借金が、期日の明六つまでに返せば二百目だが、日が出ると一貫目になるというのである。小兵衛の「アこなたは、順慶町へ行けば、本天満町親御の所へと言はるゝ。親御へ行けば、追出した、愛にはいぬとある」と言う言葉から、お兵衛は勘当以前から葛藤をかかえていたことがわかる。中之巻にあつたお兵衛の計略も、

彼なりに考えて、自分の自由になる金を手に入れ、借金を返済しようとしてのことであつたのだろうが、劇展開から考えて基本的矛盾状況の提示が遅すぎたといえる。「油地獄」の興行的失敗が事実であるとすれば、このあとに続く徳兵衛お沢の真情吐露の愁歎場の陰に隠れて、矛盾解消を意図したはずのお兵衛の策略および殺人行為を、観客が同情的共感的に享受できないためであろう。

それはともかく、お兵衛の行為は、自分の唯一の理解者であるお吉と接触して関係性を回復し、二重に疎外された状況の回避を目的としたものである。一方、借金返済を迫る小兵衛はお兵衛にとつて、最も関係性を切断したい人物のはずだが、逆に関係性を回復させてしまい、「言葉でとお兵衛が首締める」ことになつてしまう。

徳兵衛がやつて来たのを見てお兵衛は隠れて立ち聞きするが、これは関係性の切断を一時保留して、間接的なコミュニケーションを成立させるだけであるから、疎外状況下の危機を回避するための、主体的な行為がないことの繰り返しにすぎない。しかも、このあと「かたり」はほとんど豊島屋内部に限定されお兵衛が「かたり」から消滅してしまうのも上之巻と同じである。

お吉に徳兵衛は、お沢への遠慮から勘当を止められなかったことを話す。勘当後も夫婦のコミュニケーションは依然として断絶していたのである。続いて、「もしこのあたりへ狼狽へて見へましたら、七左衛門殿御夫婦言ひ合せ、父親は合点、随分母に託言いたし、土性骨入れかへ、二たび内へ戻る様に、御意見

ひとへに頼み入る」とお吉に依頼し、さらに「与兵衛めがうせたらば、追付、暑氣に赴く、さつぱりと肌物でも買いをれと、ゆめく、我らの名を出さず、七左殿の心付か、どうなりとも、御機頼み入る」と金を差出す。上之巻のお吉の言葉からも、またこのあと訪れたお沢の「ムウまた与兵衛めがこと悔みにか」という言葉からも、徳兵衛がこれまでも何度かお吉を訪問していたことがわかる。与兵衛は自分を透明化し、他者の言葉を媒介として関係性の回復をせざるをえないのである。述懐の最後に「推量なされお吉様」と言う徳兵衛は、お吉こそが自分の理解者であると認識していることがわかる。実はお沢もそう考え、お吉を訪問する。

お沢が来て隠れようとする徳兵衛の行為が、夫婦のコミュニケーション断絶を明確に示すものであり、関係性の切断にほかならないことは、いうまでもないことである。

お沢は徳兵衛の行為や態度にたいする不満、いらだちをおぼちまけるが、それは自分もまた与兵衛のことを心配して、粽一把に錢五百の錢を持ってきたことを隠そうとするものであった。その事が徳兵衛やお吉に知れると、お沢は「母がかはひ、顔しては、隔てた心に、あんまり母があいだでない。甲張りが強くて、いよく、心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、わざと憎い顔して、撲つゝ叩いつ、追出すの勘当のと、むごつらふあたりしは、継父のこなたに、かはいがつてもらひたさ。是も女の廻り知恵、許して下され徳兵衛殿。わしに隠してあの錢をやつて下さる心ざし、言葉ではけんく」と慥貧に言ふたれど、中で三度戴きし……」と、真情を吐露する。中之巻と同じく、感

動的な述懐ではあるが、問題は、徳兵衛の真情を理解していながら、すぐに自分の真情を打ち明けていないこと、さらにそのこと自体にお沢自身が気付いていないことにある。それほどまでに夫婦の関係性は切断されていたのである。

彼らはお吉を訪問することで、与兵衛に対する葛藤と自分たち自身が抱えていた葛藤とを両方とも解決したと考えてしまっている。確かに、お沢が涙にくれながら「いや許してくだされ」と言い、二人で帰っていく夫婦の間にはコミュニケーションの成立、関係性の回復が認められるが、与兵衛の抱える危機的状況を知らない二人は、自分たちの行為が与兵衛の問題解決にならないことに気付いていない。一方、立ち聞きしていた与兵衛は、両親の述懐を聞くことで間接的に両親との関係性を回復してはいるのだが、帰っていく両親と会って、直接的に関係性を回復しようとはしない。消極的な関係性の切断といえるが、これは劇的单位としては極めて重要である。お吉しかいなかったところに、両親という新たな選択肢が現前した時に、与兵衛はお吉を訪問するという行為を、わずかながら、しかし主体的に選択したことになるからである。

お吉は錢と粽を渡して与兵衛を諭す。上之巻とは違い、お吉が両親の、つまり他者の言葉を語っても関係性は切断されない。立ち聞きによつて、関係性が間接的に回復していたからである。与兵衛にとって必要なのは他者の言葉を語る媒介者としてのお吉ではなく、自分との関係性を維持してくれるお吉である。上之巻、中之巻をとおして、たびたび関係性を切断していた与兵衛は寡黙であつたし、「かたり」から消滅してしまふこともあつ

た。下之巻の両親の愁歎場でもそうであつた。それに対し、今、関係性の維持に自分の生命がかかつている与兵衛は饒舌である。「たゞ今より真人間に成つて、孝行尽す合点なれ共、肝心お慈悲の銭が足らぬ。といふて、親、兄には言はれぬ首尾。爰には売溜、掛の寄銭もあるはず。新でたつた二百匁ばかり、勘当のゆりるまで、貸して下され」と与兵衛は言う。繰り返しになるが、両親は与兵衛の抱える危機的狀況を知らないのであり、せつかくの「お慈悲の銭が足らぬ」から、自分の選択を、自分の行為を信じて、「貸して下され」と頼んでいるのである。

しかし、お吉もまた与兵衛の危機的狀況を知らなかつたため、与兵衛の推測とは異なつた方向に会話が進む。「どこに心が直つた。嘘にも銀貸してくれとは言はれぬ義理。……銭もあるはありながら、夫の留守に一銭でも貸すことはいかなく。いつぞやの野崎参り、着る物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、言訳に幾日かゝつたやら、なう、うとましやく。帰られぬうち、その銭持つて早う往んで下さんせ」と関係性の切断を告げてしまうのである。また、野崎は与兵衛にとつて、大きな意味を持つ場所であつた。二重に疎外され、関係性が切断された孤立狀況で生命の危機と行為喪失を二度までも体験した場所であつたし、お吉との間に身体的かつ家族的な関係性を回復した場所でもあつた。ここでもまた逃れようのない恐怖に怯えながらも、お吉との関係性に頼るほかないのである。実際野崎では不義はなかつたのであろうが、「不義になつて貸して下され」というのは、野崎での関係性を連想しての言葉であらう。

「貸して下され」「くだい」と言い合いが続き、とうとう与兵

衛は自分の葛藤をお吉に話す。与兵衛が自分の葛藤を話した他人とはお吉一人だけであり、彼の関係性が他とは完全に切断されていることが明らかである。与兵衛は「自害して死なふと覚悟し、是、懐にこの脇差さしはきいて出たれども、たゞ今の親の嘆き、御不便がりを聞いては、死んでこの銀親仁の難儀にかくること、不孝の塗上げ、身上の破滅。思ひ廻せば死ぬるにも死なれず、生きてはいられず」と言う。死が問題解決にはならないため、葛藤を葛藤として自分のなかで消化できなかった与兵衛は、葛藤をお吉と共有することで、問題解決への道をお吉にゆだねる。お吉との関係性に頼つて問題解決を図るわけである。上之巻でも中之巻でも危機に際して主体的行為をとりえなかつた与兵衛は、勘当から二日後、はじめて主体的行為らしい行為をとつた。劇的なるものは与兵衛の主体的行為を導くために繰り返されていたのである。

しかし、お吉は与兵衛の葛藤を自分自身の葛藤として受容しかねたし、そのこと自体もまた葛藤にはなりえなかつた。「言ふ目の色もまことらしく、そうしたこともと思ひながら、かねての偽り、これもまた、その手よと、思ひ返して」と、お吉は一旦は信用した与兵衛との関係性を簡単に切断し、「フウ、まがくしい。あの嘘わいの。まだ尾緒つけて言はしやんせ。ならぬと言ふては、きつうならぬ」と言う。自分の選択による主体的行為をとつたにもかかわらず、それが問題解決にならないという逆説的狀況に与兵衛は立たされたわけである。

ここで与兵衛は行為を喪失するわけにはいかない。行為喪失が問題解決をもたらしてくれないことが明らかだからである。

主体的な行為をとり続けることしか、与兵衛には残されていない。それが殺人でしかありえなかつたわけである。それは、「立聞きによって改心した与兵衛と、その改心を信じなかつたお吉の不幸な食違（ちがひ）い」でも、「殺人もしかねない冷徹な与兵衛と、そうした与兵衛の変貌に気づかない善良な好意を依然として持続しているお吉の食違（ちがひ）い」でもない。借金にまつわる危機的状况下で与兵衛がはじめて主体的な行為を選択したこと、唯一関係性を維持できると考えていたお吉から関係性を切断されてしまいがちながらも、主体的な行為をとろうとし続けたこと、これが下之巻前半部分の劇的なるものである。

続いて「新町の場」「北の新地の場」では、与兵衛を追う森右衛門と、森右衛門から逃げる与兵衛が描かれる。世間では、与兵衛の放埒ぶりから、女を殺して金をとつたのは与兵衛ではないかとの噂がながれていた。森右衛門は与兵衛を探して、備前屋の傾城松風のもとに向かう。しかし一足違いで与兵衛は曾根崎に行つてしまつていた。森右衛門は与兵衛の金払いを聞いて、後を追う。理由は明らかではないが、森右衛門は与兵衛と関係性を回復したがつているのである。一方強盗殺人で金が手に入つた与兵衛は、小菊との関係性を回復し、酒を飲み交わしている。そこへ刷毛の弥五郎があらわれ、侍が自分を探していることを知る。森右衛門に会いたくない与兵衛は、理由をつけてその場を去る。与兵衛は森右衛門との関係性を切断したままにしておきたいのである。上之巻で、森右衛門は与兵衛に死の恐怖を与えた。いわば死の使者である。与兵衛が森右衛門から逃げ回るのは、漠然と感じる死の恐怖からの回避ではあるが、主

体的行為といえるほどのものではない。

最後の「豊島屋の場」ではお吉が死んで三十五日の連夜の日、同行衆が集まつている時に、鼠が血に染まつた野崎の割付を落とす。日付と筆跡から与兵衛のものとなり、おそらく犯人が与兵衛であろうということになる。鼠がもたらす情報によって、与兵衛の行為がますますかかになるというのは、中之巻で伯父からの手紙で与兵衛の悪行があきらかになるのことのバリエーションであり、与兵衛は自分の筆跡―自分の言葉で、犯罪者として社会からの関係性の切断を導くことになる。やはり野崎は与兵衛にとつて死のつきまとう場所であつた。

そこへ、人から疑われまいと与兵衛が豊島屋を訪問する。かつて与兵衛は関係性を切断したために、死の恐怖に対し主体的な行為を喪失し、その解決を他人にゆだねなければならなかつたことがあつた。そのためここでは自ら姿をあらわして関係性を回復し、死の恐怖を超克しようとしているのである。皆が割付を見せて問い詰めると、与兵衛は言い逃れをして逃げ出そうとするが、町奉行の役人らに逮捕される。森右衛門は与兵衛が当日着ていたと思われる袷に酒をかけ、血の色を出す。先述の通り、かつて森右衛門は、助けてやりたいと思ひながらも死の恐怖を与兵衛に与えたことがあつた。ここでもまた森右衛門は「事頭れぬ先、遠国へも落とすか、さなくば自書を勧め、恥を隠してくれんと、新町、曾根崎、行く先々を尋ねても、跡へ廻り出合はぬ」と、何とかしてやりたいとは思ひながらも、結果的には与兵衛の罪を暴き、今度は本当の死を与兵衛に与えることになるのである。

自分の犯罪が明らかになった与兵衛は覚悟の告白を述べる。
「一生不幸放埒の我なれ共、一紙半銭盗みといふことついにせず、茶屋、傾城屋の私は、一年、半年遅なはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り、一夜過れば親の難儀、不幸の咎勿体なしと思ふばかりに眼つき、人を殺せば人の歎き、人の難儀といふことに、ふつゝと眼つかざりし。思へば二十年來の不孝、無法の悪業が、魔王と成て、与兵衛が一心の眼を眩し、お吉殿殺し、銀を取りしは河内屋与兵衛、仇も敵も一つ悲願、南無阿弥陀仏」と言うのである。自分の葛藤を話すことで他者とのコミュニケーションをとり、関係性を回復しようとしている。与兵衛最後の主体的行為である。

〈注〉

〈1〉森修「近松門左衛門」(三一書房、昭和三四)〈新装復刊〉昭和四六年 一八三〜六頁

〈2〉近石泰秋「操浄瑠璃の研究 続編」(風間書房、昭和四十年) 八八頁

〈3〉諏訪春雄「女殺油地獄」の読み方―近松への試み―(岩波書店「文学」、昭和四六年八月。笠間書院「近松世話浄瑠璃の研究」所収、昭和四九年)や、井口洋「女殺油地獄―立聞きと食違ひ―」(岩波書店「文学」、昭和五十年十月。和泉書院「近松世話浄瑠璃論」所収、昭和六一年)などに、従来の論が整理されている。

〈4〉廣末保「女殺油地獄についての覚書」(東京大学出版会「元禄文学研究」所収、昭和三十年)

〈5〉ローマン・ヤーコプソン「一般言語学」(みすず書房、昭和

和四八年) 一八七〜八頁

〈6〉荒木繁「女殺油地獄」(至文堂「国文学 解釈と鑑賞 現代に生きる近松の文学と舞台」、昭和四五年十月)

〈7〉注〈2〉井口論文。

〈8〉森山重雄「女殺油地獄」(日本文学協会「日本文学」、昭和五六年七月)

※「女殺油地獄」本文の引用は「近松全集 第十二巻」(岩波書店、平成二年)を参照し、漢字を宛て、送り仮名を補った箇所がある。節章は省略した。

(埼玉県熊谷市立女子高等学校教諭)